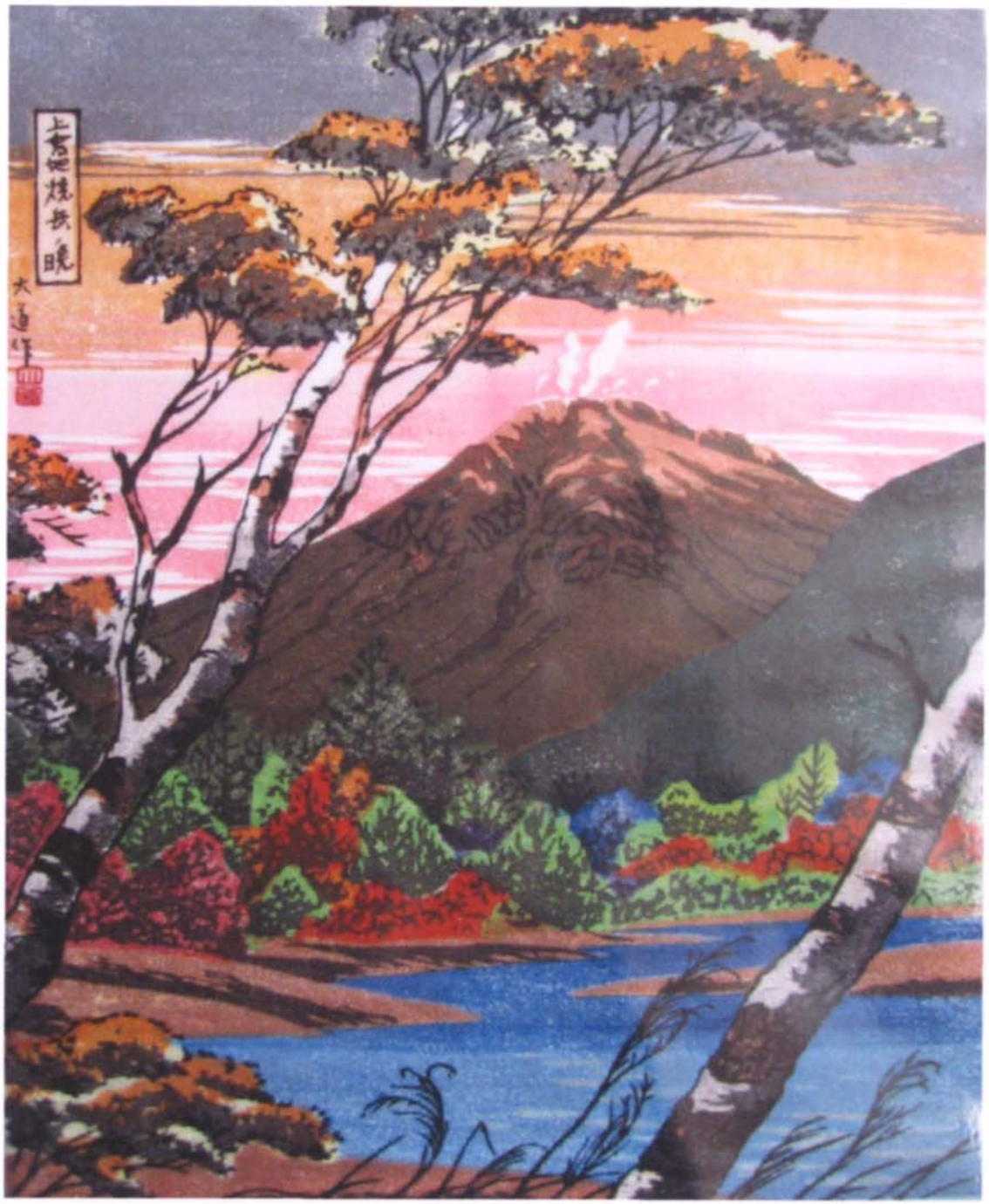
加藤大道 版画展

北アルプス
～山の情景～

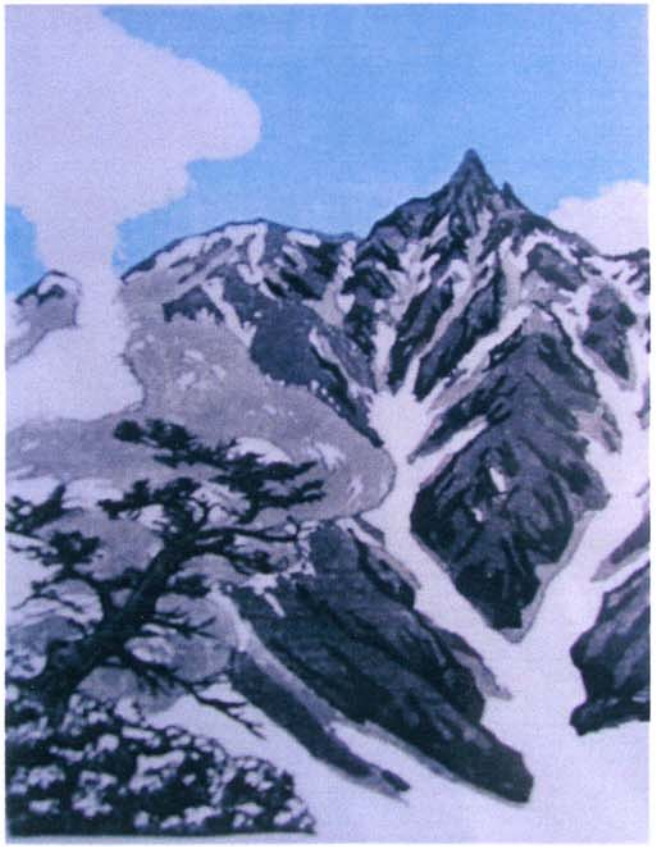


加藤大道 版画展
2016

記念　山の日

北アルプス

～山の情景～

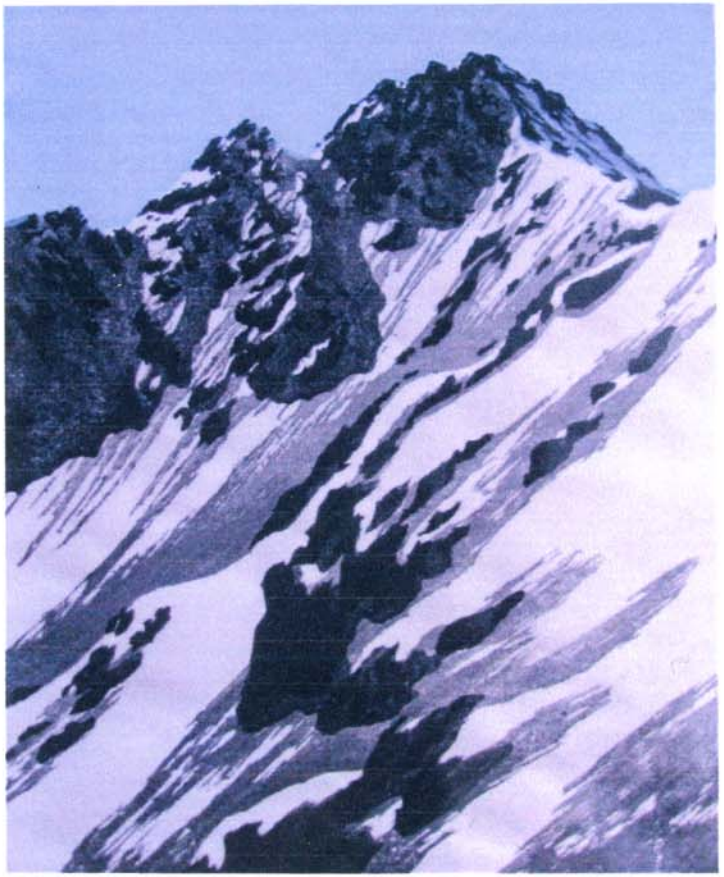


*Cafe*プレイエル＆ギャラリーやましろ
長野県松本市波田3058－5
Tel 0263-92-8158　定休日　水・木

加藤大道 版画展
2016

北アルプス

～山の情景～



*Cafe*プレイエル＆ギャラリーやましろ
長野県松本市波田3058－5
Tel 0263-92-8158　定休日　水・木

曲つた版画荘

加藤大道

破屋はだんだんと曲つてゆきます。刻つた版木の重さで曲つてゆくのではないかと思う位刻りました。埋高く積つた版木の一つ一つが手塩にかけた子供の様に愛着が不思議につよく涙ぐましくなります。

いつ頃からか自己流に始めた版画が、知らず知らず生活を支へる仕事になり、親子五人が生きています。別に大きい抱負を持つたわけでもなく、芸術家を自任しているわけでもありません。好きな版画を楽しんで居るうちに、私の頭に霜を置き、眼もかすんで来ました。そして妻も子供達も門前の小僧の習いで、版を刻り始め、版画荘の家は名実ともに版画の家になり、木片と紙に埋つて、来客の坐る場所さへもない有様です。こゝを一度訪れた人は皆驚きの言葉の外は暫しぼうぜんと云う有様です。

無理をしたむくいで一眼を失つてより十年不自由の隻眼で、一日として版刀を持たぬ日はない位で、死ぬその日迄好きな道を続けるでしよう。清い山川に取りまかれた粗朴純情な田舎の風物、無邪気な子供の生活。美しい自然の姿の意の幾分かを写して、衣に食にこと足りながちの世の中の、和やかな心の糧の一端として送り得たならば、私の版画も無駄ではないと思います。

人は皆善い人、自然はみな美しい信州の山奥の川添へにお母さんが私を育てゝくれた懐しい思い出の曲つた破屋程、又私にふさわしく、住みよいところは他に無いと思います。

小鳥も訪れます。花も笑つてくれます。四季折々の深き恵みに満ち朝夕おとなふ知己の厚情を感謝しつゝ、すべてを忘れて版木と暮してゆきたく、私のあとは子供達が楽しんで又刻つてゆく事でしよう。そして大道の版画は外に取り得はなくも、童心がある、純情が籠つているといわれる様に、美しい心になつて、精進して大衆の友となり、幼い子供から老人に到る迄、愛玩され、日本の国の隅々迄ゆきわたらせたく、これが終生の願いであります。

版木で埋つている版画荘を訪れ、版画荘の雰囲気を味つて下さる事を切に望んでおります。

朝光の清らかにさす破屋（やぶれや）に今日の一日も版刻に生きん

かなしくも親子五人生きてきぬつくる版画に心をこめん

昭和二十三年三月

加藤大道

1896（明治29年）
▼
1965（昭和40年）

◎かとう・だいどう

▲加藤大道

◀挿図1「信州雑炊橋」（加藤大道作・昭和15年）

二代目加藤大道である加藤重治（版画家・一九二八～）は初代加藤大道を回想して「初め日本画家として出発した父だったが、生活のため上高地で絵葉書版画を頒布、やがてその木版画が生涯の仕事となった。自然と子供を相手に、生活は苦しくも、好きな道に自由気儘に生きたうらやましい人生であった」と語っている。

木版画家加藤大道は本名を健一郎といい、明治二九年（一八九六）南安曇郡安曇村橋場に、父富吉・母えつの長男として生まれた。小学校高等科を卒業すると逓信講習所に入所、電信士の資格をとり塩尻郵便局に勤務するが、画家への念止み難く、大正七年（一九一八）、松本市出身の南宗画家赤羽雪邦（一八六五～一九二八）の内弟子となり上京、日本画家としての第一歩を踏み出し、雪深と号した。

大正一〇年、雪邦の勧めにより南宗画の研修のために中国に渡り、約二年間南支方面をめぐって修業した。帰国後、さらに大阪在住の元美校教授白山雨山に師事、南画と彫刻を学ぶ。昭和三年（一九二八）、雪深は研鑽に一段落して郷里安曇村に帰り、制作の場を臨川荘と名づけ、名を大道と号した。

昭和八年、欧州から帰国して農民美術運動を提唱し実施した洋画家山本鼎（一八八二～一九四六）の指導によって、大道は同志等と共に「日本アルプス山岳芸術研究組合」を組織する。この組合を中心に、農民文化の発展を目ざして、青年有志に木彫・染色・版画の推奨・指導を行い、大道はこの活動を通して、一転して南宗画家から木版画家への道を進むこととなる。やがて版画の販路拡張のために頒布会を組織し、毎月作品を愛好家に刊行して版画家としての地歩を固める。また、戦後の登山ブームにのって、上高地での絵葉書版画が新しい商品として需要を増し、その定期的な刊行は大道版画のひとつの典型を生む結果となった。昭和一八年には、秩父宮殿下がその素朴性と芸術性に強く魅かれて購入され、それを契機に三〇年代まで大道版画の支持者となった。

戦後二〇年代初頭は、生活は疲弊し合わせて山村も食料難であった。そんな中、大道は版画制作のあい間をぬって農事に励んだ。まさに困窮の時代であった。昭和二一年、著述家古村青山（長野市）の発起により、長野市有志の協力で『加藤大道版画選集』全二巻が完成し頒布された。またこの年、長崎の原爆で病床にあった永井隆と交流、『木版画集原子野の花』第一集、第二集の共作に着手、同二五年に完成した。かねてより計画中であった相馬御風との共作『童心帖』は、御風の死によって版画一〇枚で中断となった。

木版画家として郷里に根を下ろして三〇年、その間窮乏の生活と制作への無理が重なって右眼を失いながらも、不屈の精神で「左光」と称して隻眼作家として立った。昭和三二年、重治の住む松本に転居したが、病床の日々が多く制作は捗らなかった。昭和四〇年逝去、六九歳。

▶挿図2「国宝松本城」(加藤大道作・昭和18年頃)

◀挿図3「雪国の童」(加藤大道作・昭和22年頃)

〔大道の画業〕

「ふるさと」(図139)　積雪のある夕闇迫る頃の山村の一隅を、大きな土蔵と民家を主従の関係に、見事に構成した大道の傑作である。とくに民家の明かりが生活感を醸し出し、遊ぶ子らと共に人の気配さえ感じさせてくれる。大道は子供のあどけない姿を愛情こめて表現しているが、この作品に見る子供たちの表情は見事で、一人ひとりの声までが聞こえてくるような豊かな表現となっている。木版画家として最も充実した頃の名品である。

「冬の上高地」(図140)　大道は帰郷後間もなく、夏期は旅館の仕事を手伝うため上高地で生活をしていた。大道にとって、上高地の風景は自分の庭を眺めるようなもので、すべて自家薬籠(やくろう)中のものであった。それだけに、山の表情や一木一草に至るまで、愛情をもって眺め描くことができた。この作品は冬の大正池と穂高連峰を見事にとらえ、特に山腹に棚引く雲は、とかく厳しくなる山岳風景を、穏やかなものにしている。色調も柔らかく、ほのぼのとした温かさを感じさせる作品である。

「上高地の晨(あした)」(図141)　木版画は基本的には白と黒による芸術で、多色刷りであってもその本質には変わりはない。その意味で、大道版画に登場する雪景は、版画としての効果を充分に発揮するように工夫されている。この作品はやや左寄りに明神岳の山塊を配し、中景に森を、そして前景に川の流れを構成した、ゆるぎない構築性をもっている。特に流れの中に点在する冠雪の石はリズムをもって語りかけているようで、こんなところにも大道の版画への愛情を感じることができる。

「信州雑炊橋(ぞうすいばし)」(挿図1)　この作品は、大道が南画家から木版画家へ転向の一時期の作品で、縦構図の南画をそのまま版画にしたともいえるもので大道ならではの好感のもてる佳作となっている。紅葉の季節であろうか、山間の庵(いおり)を求めてひとりの雲水が雑炊橋を行く風情は、画面構成の上で的確なものとなっている。南画を版画に仕上げたひとつの例として見ることができる。

「国宝松本城」(挿図2)　この絵は残雪の微妙な諧調を、八版刷りをもって表現した見事な白黒版画。大道の建造物の作品の中では傑出し、抜群の力量感をもっている。屋根に残った雪の面積が画面全体の中で調和し、冬の松本城の厳然とした姿を見事に表現している。

「雪国の童」(挿図3)　大道は郷里の自然をこよなく愛するとともに、無邪気な子供の姿を心ゆくまで画面に取り込んで、童心への憧憬を謳(うた)っている。版画なればこそのひとつの表現領域といってもいい。これはそうした子供の情景を描いた一点で、雪降る中を兄弟であろうか、両手を上げて跳び廻っている姿を動静豊かにとらえている。子供への愛情が横溢(おういつ)した作品である。

(征矢野　久)

童心帖

加藤大道 版画展

2016

～こどもの情景～

Cafeプレイエル＆ギャラリーやましろ

長野県松本市波田3058－5

Tel 0263-92-8158　定休日　水・木

http:/ www.cafe-pleyel.com/　　*facebook.com*

市民タイムス
（第３種郵便物認可）

加藤大道 長編小説に

同郷・安曇の上条育弘さん 生涯ひも解く 出版を検討

旧安曇村（現松本市安曇）出身の版画家・加藤大道（だいどう）（1896～1965）の生涯を追った長編歴史小説を、元警視庁職員で郷土史研究家の上条育弘（筆名・あずみ太郎）さん（67）＝安曇＝が書き下ろした。大道は長崎の放射線医学者・永井隆との交流などを切り口に近年顕彰が進められているが、小説に著されるのは珍しい。自然や子供との触れ合いの中で創作意欲をかきたて、人との出会いや別れを大切にした大道の人となりに迫った作品で、出版が模索されている。

（有賀文香）

大道を題材に書き下ろした小説『点景』を手にする上条さん

小説は『点景』と名付けられた。運動神経がよく、やんちゃだったという幼少期に始まり、上京、結婚、画家の赤羽雪邦や歌人の相馬御風との交流から視力を失うまで、69年の生涯を丹念にひも解いている。日露戦争の開戦や明治天皇の崩御、焼岳の噴火など当時の社会情勢や自然災害にも触れ、大道が何を思い、どのように過ごしたかを推し量りながら人生を浮き立たせた。

上条さんが大道に関心を持ったのは10年以上前になる。梓川高校卒業後に上京し、長年警視庁に勤めたが、平成13年の退職後に帰郷し、大道の作品を常設する同市波田の喫茶店・カフェプレイエルで版画に触れた。「故郷にこんなに素晴らしい人物がいたのかと出合いの妙を感じた。いつか生涯をまとめたいと思った」と話す。プレイエルを営む古畑博子さんらの協力を得ながら年月をかけて資料や作品を調べ、生前に思いをはせながら書き上げた。

古畑さんによると大道を追ったルポルタージュなどは出版されているが小説は初めてだ。上条さんは今後、出版を検討したい考えで「作品ににじみ出ている大道の温かさや優しさを小説からも伝えられれば」と話している。

加藤大道

加藤大道（かとう・だいどう）旧安曇村橋場出身の版画家。本名は浅野健一郎。画家を志して赤羽雪邦に師事し、中国にわたって南宗画を学んだ。帰郷後は木版画に転じ、自然や子供を題材に多くの作品を残した。長崎で被爆した放射線医学者・永井隆（1908～51）の絵や書を版画に彫り、平和を希求したことで知られる。

市民タイムス　2016年1月23日